

8. 素鷲熊野神社（そがくまのじんじゃ）

（1）歴史

素鷲熊野神社は、辻の天王原に祭られていた小社を、文治4年（1188年）に潮来の天王河岸へ移し、牛頭天王（ごずてんのう）と呼んだのが素鷲神社の始まりです。牛頭天王は八坂神社の祭神で、元来はインド祇園舎の守護神とされ、疫病除けの神として知られています。文治4年の遷座と牛頭天王を奉斎した背景には、潮来地方での疫病の流行などがあったものと思われます。元禄9年（1696年）に牛頭天王は、一村一社の政策により現在地に移り、熊野三社権現と相殿になりました。さらに天保15年（1844年）、牛頭天王は仏教色の強い呼称から、神道的な素鷲神社へと社号を改め、同時に熊野三社権現も熊野神社と名前がかわりました。明治10年（1877年）に長く相殿であった両社は、素鷲熊野神社となって現在に至っています。祭神は、素鷲社は須佐之男命（すさのおのみこと）、奇稻田比命（くしなだひめのみこと）で、熊野社は伊弉諾命（いざなぎのみこと）、伊弉冊尊（いざなみのみこと）、速玉男命（はやたまおのみこと）、事解男命（ことさかおのみこと）。境内には神明神社、大六天神社、松尾神社、淡島神社、金比羅神社、愛宕神社、大杉神社、稻荷神社が祭られています。

（2）潮来祇園祭り

潮来祇園祭禮は、元禄年間（1688～1704年）徳川光圀の命により天王山に鎮座する素鷲熊野神社が遷宮され、山車が奉納されたことに始まる素鷲熊野神社の例大祭で、800有余年の歴史と伝統のある祭禮です。

毎年8月の第一金曜日から日曜日までの3日間かけて行われ、まず初日に2体の神輿（俗に天王様、権現様と呼ばれている）が出御する「御浜下り」で始まります。各町内の山車がそろい、神輿をお迎えし、中日は町内渡御（町内御巡行）、最終日には還御（お山より）が行われます。

この祭りに花を添えるのは、三丁目の獅子舞をはじめ、総数十四台もの山車、そしてこの山車にのった芸座連によって奏でられる潮来ばやしです。

山車のうち三台は県指定文化財、そして潮来ばやしは県指定無形民俗文化財に指定されています。圧巻は「の字廻し」や「そろばん曳き」に代表される「曲曳き」で、若衆と山車、芸座連が一体となった様子は必見です。

茨城県指定文化財

* 無形民俗潮来ばやし 昭和39年7月31日指定

* 有形民俗潮来祇園祭禮山車(3台)

平成5年1月25日指定



潮来祇園祭

（3）大櫓（おおけやき）（県指定文化財）

潮来の天王様として親しまれている素鷲熊野神社の入口にある大けやきは、樹周目通り約8m、高さ約11m、推定樹齢約800年で、その姿は、威風堂々として、夏には大きな陰をつくり、参拝者の涼となっています。

このような大樹は当地方で珍しく昭和39年7月31日に県の天然記念物に指定されました。



大櫓の大木